

潜入秘密探偵／4人のメロス

～仲間たちよ永遠に～

竹村直久

登場人物

早川 洋介 (31) 元劇団4人のメロス主宰者  
諸岡 良和 (34) 同 劇団員(作家兼演出家)  
諸岡 恵 (32) 同 (諸岡の妻)  
太田 由加里 (30) 同 (現在プロの女優)  
波島 勝四郎 (35) テレビヤマトプロデューサー  
鬼海 孝子 (26) 同 報道レポーター  
須藤 健二 (28) 同 社長の息子  
武崎 啓一 (32) 私立探偵

\*武崎は途中まで他の登場人物に扮しており、武崎の扮した人物本人は登場しないので、実際に劇に登場する人物は7名である。

未だ明かりが入らない真っ暗な舞台の中、時報を知らせる電話からの音声流れる。

音声「・・・ただ今から、3時59分、50秒をお知らせします(ピーッ)・・・只今から、4時、ちょうどをお知らせします・・・(ピッ、ピッ、ピッ)

ピーッと時報が鳴ると同時にドカーンと凄まじい爆発音と眩い閃光(逆光)が舞台を包む。

SE 怒号、悲鳴、非常ベル、消防車、救急車のサイレン。

アナウンサーのN「今日、世田谷区で、一人暮らしの女性の元へ配達されて来た小包が突然爆発し、受け取った女性が死亡すると言った事件が起きました。死亡したのはテレビドラマ等で活躍中の女優、太田由加里さんのお母さん、太

田友子さんで、警察では数年前から由加里さんを付け狙っていた、ユカリクレイジーと名乗るストーカーの犯行と見て、捜査を進めています・・・」

舞台はテレビ局の一室である。

スタッフがミーティングに使ったり、出演者の控え室にしたりする部屋である。

上手にドアがある。このドアがこの部屋の唯一の出入り口である。

中央やや下手寄りにテーブルがある。テーブルの上にはテレビ局で使うプロ仕様のビデオカメラが置いてある。その他に数冊の雑誌とカセットデッキがあり、椅子が2脚ある。

奥の壁に大きめの時計が掛かっており、現在5時30分を差している。

舞台奥ほぼ中央にスチール製の掃除用具入れがある。

その横には書庫や戸棚、観葉植物等が置いてある。

ドアを開けて波島勝四郎に連れられた諸岡良和と恵が入って来る。

無精髭を生やした波島はラフな服装にウエストバッグを付けている。

諸岡と恵は質素だがきちっとした身なりをしている。

波島「どうぞ、こちらでお待ち下さい」

恵「それであるの、どうなんでしょうか、早川さんは見つけて頂けたんでしょうか」

波島「あ、まあどうぞ、こちらにお座り下さい」

とテーブルの方へ二人を導き、椅子を勧める。

促されて椅子に座る二人。

波島は地獄の様に臭い口臭の持ち主であり、話を聞

く恵と諸岡は時々顔をしかめて鼻をつまんだりする。

恵「あの、早川さんは・・・」

波島「いえ、申し訳ありませんが番組の都合上それはまだお答え出来ないんです・・・再三打ち合わせさせて頂いた通り、今私がビデオカメラを回したらレポーターの鬼海孝子が登場します、そして簡単にあなた方お二人のことや、あなた方が何故早川洋介さんの搜索を番組に依頼されたか等の説明をします」

恵「（緊張して）はい・・・」

波島「良いですか、我々が撮影したいのは飽くまであなた方のごく自然な表情ですので、例え結果が早川さんと再会出来ようと出来まいと、決してそのお気持ちを誇大したりなさらないように、素直な気持ちで言葉を交わして下さい、良いですね」

恵「はい」

諸岡「はい、わかりました」

波島はテーブルの上からカメラを取り上げると肩に担ぎ、ファインダーを覗いて照明を点灯する。

明るく照らし出される諸岡と恵の姿。

以後波島は常にカメラを手にし、他の人々を撮影し続ける。

ドアを開けて鬼海孝子が入って来る。鮮やかなスーツに身を包み、スラリとして頭の切れそうな雰囲気である。マイクを持ち、バインダーを小脇に抱えている。

孝子にカメラを向ける波島。

孝子「皆さんこんにちは、さて、今日の（あの人を捜して）御依頼の方々を紹介したいと思います」

と諸岡と恵の側へ来る。

孝子「どうも、初めまして、鬼海孝子です、宜しくお願いします」

恵「こちらこそ宜しくお願いします」

孝子「（カメラに向かい）こちらはかつて4人のメロスと言う小劇団で演劇活動をなさっていた諸岡良和さんとその奥様でいらっしゃる恵さんです（と二人に頭を下げる）今回お二人が番組に捜索を依頼された早川洋介さんと言う人物は、かつてお二人と一緒に4人のメロスで活動していた仲間の方なのですが、今はある事情を抱えて行方が分からなくなってしまっているのです。それではまずその4年前まで活動していた4人のメロスと言う劇団について御説明したいと思います」

孝子はバインダーに挟んであった一枚のコピーを取

り出す。

孝子「ここに今から5年前、平成12年の4月17日付けの日々新聞芸術情報欄の劇評に、当時の4人のメロスの第二回公演を紹介した記事のコピーがあります」

カメラに向かってコピーを読む。

孝子「素晴らしい舞台を観た、なんとこの劇団のメンバーである4人の若者たちは、全員かの劇団青春座の研究生であったのが、あまりに成績が悪かった為に上級クラスへ進級出来ず、退団させられた落ちこぼれだと言うのだ。この舞台が成功した要因は彼等のひたむきな情熱と溢れるばかりのパワー、そして何より熱い友情で結ばれたチームワークの勝利であろう。この公演は彼等にとって、いやその場に居合わせた全ての観客にとっても、いつまで

も心に残る思い出として生き続けて行くに違いない・・・（コピーを離し）その4人のメロスと言うのはその名の通り4人で構成されていたのですが、そのメンバーは今ここにいらっしやる諸岡さん御夫婦の二人と、それに今テレビドラマ等で活躍中の人気女優、太田由加里さん、それに今回搜索を依頼された早川洋介さんの4人だったのです」

諸岡夫婦にマイクを向ける孝子。

孝子「今日もし早川さんにお会いすることが出来たら、お二人はどんなことをお話ししたいですか？」

恵「・・・」

諸岡「皆心配していたよって・・・今まで連絡も寄越さず、一人ですらどうしていたのかって（言葉を詰まらせる）・・・」

孝子「そうですか、お二人にとって、早川さんと一緒に活動し

諸岡「(頷く)」  
ていた頃のことは忘れられない思い出なんですね」

孝子はバインダーを開くと資料を取り出す。

孝子「スタッフはまずかつて早川さんが住んでいたアパートからの足取りを追いました。でも早川さんはそこを出て何所へ行くつもりなのかを誰にも連絡していませんでした。それにはきつと連絡出来ない理由があったんですね」

諸岡「(頷く)」

孝子「失礼とは思いましたが、足取りを探す為には仕方がありませんので、我々スタッフは当時早川さんの抱えていた個人的な事情も調べさせて頂きました。そうしたら早川さん、当時大変な借金を抱えていらっしやっただ様なんです」

恵「……………」

孝子「スタッフも結局アパートを出てからの足取りは全くつかむことが出来なかったのです。ところが一週間前のある日、テレビを通じて全国に放送していた呼びかけに応じてなんと早川さん御本人が、局へ連絡を下さったのです」

思わず孝子の顔を見る諸岡と恵。

孝子「そうです、早川さんは自分を捜していると言う諸岡さんたちの呼びかけに応じて今日ここへ来て下さいました。どうぞ、早川洋介さん中へお入り下さい」

ドアを開けて早川洋介が駆け込んで来る。ラフな服装である。

早川「ようー!」

恵「早川さん!」

諸岡「早川！」

思わず立ち上がる2人。

早川「何か心配かけちゃったみたいだな！」

諸岡「バカ、何所に行ってたんだよお前」

早川に駆け寄る二人。

恵「・・・(泣いてる)」

早川「恵(と肩に手をやる)」

ふと恵は2人から離れ、仰々しくポーズを取る。

恵「(叫ぶ) 人類の未来と、平和の為に！」

それに応じてそれぞれポーズを取る諸岡と早川。

諸岡「力を合わせれば何でも出来る！」

早川「永遠の愛と友情と」

恵「勇気と希望の為に」

三人「フォーエバー！ 4人のメロス！」

決めのポーズで止まる三人。

肩を叩き合って歓声を上げる。

早川「お前等元気にしてたかよ」

諸岡「元気にしてたかじゃないよ、お前一人で何所に行ってたんだよ」

恵「もう、早川さん何やってたのよ」

早川「うん・・・」

諸岡「そうだ早川、実は俺たちな、結婚したんだ」

早川「・・・そうか、そうだったの・・・」

恵「・・・」

早川「そうか恵、良かったな」

恵「うん（微笑む）・・・」

早川「御免な何も知らなくて、結婚式にも出られなかったな」

諸岡「そんなもん挙げなかったよ」

早川「そっか・・・」

諸岡「子供がいるんだ、未だ7ヶ月だよ、男の子」

早川「（驚き）へえーっ、そっか、へへ、隠れて逃げ回ってる間に時代も変わったな、二人してお父さんとお母さんかよ・・・」

カメラに向かって説明する孝子。

孝子「実は早川さんは今も借金を抱えて債権者から逃亡中の身の上なのです。そこで通常ならばスタジオにて再会の模

様を収録するところなのですが、今回はこうして控え室にて密かに収録することになったのです」

その様子を食い入る様にカメラで撮影している波島。

恵「ねえ、取りあえずどっか行こうよ」

諸岡「そっだな」

恵「（孝子に）本当にどうも、ありがとうございました」

頭を下げる三人。

部屋を出ようとする。

波島「（カメラを外し）あ、ちょっと待って」

恵「？（止まる）」

波島「（近くに来て）実はあの、今日は皆さんにひとつお願いがあるんですが」



恵 「何ですか？ あの、アナタ物凄く口が臭いんですけど、あんまりそばへ来ないで話して頂けませんか」

波 島 「あ、それは失礼いたしました」

と一礼して2、3歩下がる。

波 島 「ご存知のお方もおありだと思いますが、実はかつてあなた方と一緒に4人のメロスで活動なさっていた女優の太田由加里さんと、我が社の社長の御子息である須賀健二さんとの結婚披露宴が、今日このビルの別室で7時から行われるんです」

恵 「……」

波 島 「その披露宴に、是非あなたたち三人も昔の友人として出席して頂けないかと思ひまして」

恵 「そんなの無理に決まってるじゃない」

諸 岡 「そうだ、そんな話が違うじゃないですか」

波 島 「いや、あの、皆様方には申し訳ないと思つたのですが、実は早川さんを諸岡さん御夫婦に引き合わせる日を今日にしたのは、実はそうした事情があつたんです」

恵 「そんなこと勝手に決められちゃ困るじゃないですか、私たちに出る義務なんかないでしょう、悪いけどお断りします」

波 島 「ちよつと待って下さい」

ドアを開けて須賀健二が入つて来る。出て行くとする三人の前に立ちはだかる。須賀はタキシードを着ている。何所か育ちの良い上品な雰囲気漂わせている。

波 島 「皆さんテレビ等を見て御存知かと思いますが、今回太田由加里さんと御結婚なさるテレビヤマト社長の御子息である須賀健二さんです」

三人に頭を下げる須賀。

須賀「皆さん今日は本当に失礼なことを致しました」

三人「……」

須賀「お願いします、御存知の様に由加里は数年前から付け狙われていたユカリクレイジーと名乗るストーカーに、一年前爆弾でたった一人の肉親であった母親を殺されました。それにあの気性ですから他に出席してくれる友人もなく、芸能界でやって行けるのは裏からの僕の後押しがあるからだと噂されているくらいなんです」

恵「その通りでしょ」

須賀「……結婚式の晴れの舞台に招待出来る友人もいないんです」

恵「そんなの自業自得じゃないですか」

諸岡「……」

須賀「……お願いします、由加里の為に出席してやって貰えないでしょうか、この通りです」

深々と頭を下げる。

須賀「お願いします、あいつもきくと喜ぶと思うんです」

諸岡「……随分虫の良いお話ではありませんか」

恵「ハッキリお断りします」

須賀「……」

これらの様子をカメラで撮影している波島。

恵「ちょっと、もう番組の撮影は終わったんじゃないんですか、もう撮るの止めて下さいよ」

無視して撮り続ける波島。

恵はカメラを止めさせようとするが、波島は抗ってカメラを止めない。

恵 「ちょっと！ 貴方どう言うつもりなんですか」

波島はハア―と恵に毒息を吹きかける。  
とたんに顔を歪めて鼻をつまむ恵。

恵 「臭いっ！（と後ずさる）」

波島 「（カメラを外し）皆様が由加里さんをお恨みになる気持ちにはよく分かります。ですがいつまでもそう肩肘を張っていても仕方がないのではないのでしょうか、これを良い機会として和解されてはいかがなものでしょうか」

須賀 「お願いします、式はもうすぐ7時からなんです、少しの間でも結構です、出席してやって貰えないでしょうか」

無視して行こうとする三人。

須賀 「あの、出て下さったら一人5万円、いや10万円差し上げます」

恵 「（止まり）友情ってお金で買える物なの？ だから芸能界って嫌なのよ、それってどうせ由加里の差し金なんじゃないの？ 全くあの女らしいわよ」

部屋を出ようとする。

須賀 「一人20万円では！・・・30万円では！」

早川が振り返る。

早川 「50万円では！」

須賀 「・・・はい、分かりました」

恵 「ちよっと早川さん、何言ってるの」

早川 「だって50万円は大きいよ」

諸岡 「早川！」

早川 「お前等だって何で俺が今こんなふう<sup>に</sup>身を隠してるか知ってるだろう、いいじゃんか、理由はどうあれ金は金なんだから」

恵 「そんな、早川さん違う、そんな人じゃなかった」

早川 「そんなこと言ったって」

恵 「お金で身を売る様なマネしたら由加里と同じじゃないですか」

早川 「そうだけど、俺は大変だったんだぞ、お前等分かんないだろうけど、だって俺は全部一人で背負って来たんだぞ」

諸岡 「そんなのお前が勝手に一人で背負い込んでいなくなっちゃったのが悪いんじゃないか」

早川 「長年借金に負われて逃げ回ってりや卑屈な人間にもなるよ、な、お前等、俺を助けると思ってる付き合ってくれよ、

一人50万ずつで三人で150万だろ、俺凄く助かるよ」

諸岡 「なあ、借金は俺と恵で協力するから、由加里の結婚式になんか出ないぞ」

早川 「そんな、突っ張っててもしょうがないよ、悪いけどお前等だってそんなに金がある風には見えないぜ」

諸岡 「・・・」

恵 「信じらんない、嫌だ、私嫌だ、帰る」

ドアを出ようとする恵にハアと毒息を吹きかける  
波島。

恵 「うぐっ・・・（と鼻をつまんで後退する）」

波島 「折角3年振りに会えた仲間に対して、それは冷たすぎるんじゃないですか？」

マイクを手にカメラに向かう孝子。

孝子「皆さんご覧下さい、かつては熱い友情で結ばれ、見事なチームワークでその公演を成功させたと新聞記者にも言わしめた彼等が、かくも醜くいがみ合う様になってしまったのです。時の流れと言うものはなんと残酷なものなんでしょうか」

恵「酷い、何でそんなこと言われなきゃならないのよ！（鼻をつまんで波島に）どいてよ！」

諸岡「ホラ早川！ 行こうよ」

と早川を強引に引っ張って行こうとする。

波島「（怒鳴る）ちょっと待てお前等あ！」

驚いて静かになる一同、鼻をつまむ。

恵「・・・何ですか一体」

波島「いいか、女優太田由加里とテレビヤマト社長の息子との結婚披露宴は今夜7時から全国に実況生放送が決まっている。これは局を挙げての大イベントで、俺もプロデューサーとしてこの仕事に命を賭けている」

恵「そんなこと私たちに関係ないでしょう」

波島はウエストバックから大きなナイフを出して鞘から抜き、三人の方へ突きつける。  
ビククリして止まる三人。

須賀「（驚いて）波島さん！」

恵「な、何のマネですか一体」

波島「言っただろ、俺はこの仕事に命を賭けてるんだ！ 今日  
の式を感動的に盛り上げる為にお前等にはどうあっても  
昔の友人として式に出席して貰う！」

恵 「狂ってるわよ」

波島 「何とでも言え、なあ、アンタたち、情けないと思わないのか」

三人 「・・・」

波島 「どうしてかつての仲間を素直に祝福してやろうと言う気になれないんだ。そりゃ仲間を裏切って一人だけメジャーデビューを果たした由加里さんのことをアンタらが許せない気持ちも分からないでもない、でも若い頃ってなあお互い少なからずそういう事があるもんなんじゃないのか、それに彼女がここまで女優としてやって来たってことは、由加里さんに才能があったからこそのことなんじゃないのか、もうそろそろお互い若気の至りってことで許し合っても良い頃なんじゃねえのか！」

須賀 「波島さん（と鼻をつまんで波島の腕をつかむ）」

波島 「健二さん、ここは私にまかせて」

と須賀の手を退けて再び恵たちを見る。

波島 「かつての名も無い小さな劇団から、一人でもプロの世界で活躍する有名女優が出たんだから、素直に祝福してやったら良いじゃねえか！」

恵 「アナタなんかには、私たちの気持ち分かる訳ないわよ」

波島 「ああ分からねえなあ、手前らみたいにいじけてウジウジした人生送ってる奴見てるとヘドが出らあ！」

波島は手にしたナイフをテーブルの雑誌の束にドスツと突き立てる。

ビビる三人。

これらの展開の間、孝子はまるで自分は関係ないかの様に一人離れて立ち、バインダーを開いて台本をチェックしたりしている。

恵 「・・・貴方がこれ以上何を言っても、私たちは絶対に結婚式になんか出ませんよ」

問

波島 「・・・そうか、それじゃしょうがない、アンタ等三人に帰って欲しくない本当の理由を、今から説明するよ」

恵 「えっ？」

波島はポケットから一本のカセットテープを出し、テーブルの上にあるカセットデッキにセットする。

波島 「お前等ユカリクレイジーのことは知ってるな、そう、数年前から由加里さんに付きまとい、去年爆弾入りの小包で由加里さんのお母さんを殺したストーカーのことだ」

恵 「それが何だって言うんですか」

波島 「まあこれを聞いてみる、これはなあ、今から4日前に由加里さんのところにかかって来た、ユカリクレイジーからの脅迫メッセージだ」

デッキの再生スイッチを押す波島。

デッキから留守番電話の応答音が流れ出す。

音声 「・・・只今留守にしています。ピーツと鳴ったら、メッセージをお入れ下さい・・・(ピー音)」

ボイスチェンジャーにかけられた不気味な声が流れ出す。

声 「ユカリユカリ、イトシユカリオマエガケツコンシテシマウナンテシンジラレナイヨオオオレヲノコシテオマエガシアワセニナルナンテゼツタイニユルセナ

イ、オマエヲコツパミジンニフキトバシテ、オレモシン  
デヤルウゝ・・・」

固唾を飲んで聞き入っている三人。

声

「フガツ29ニチ、テレビヤマトデオコナワレルケツコン  
ヒロウエンノカイジョウデ、オマエヲフキトバシテヤル、  
コレハユカリヘノ、4人ノメロスカラノサイゴノフクシ  
ユウナノデアゝ・・・」

テープを止める波島。

恵

「・・・何が言いたいんですか？」

波島「聞いただろう、これは4人のメロスからの復讐だって」

恵

「そんな、ユカリクレイジーの正体は4人のメロスだって  
言うんですか？」

諸

岡「そんなことある訳がないじゃないですか、犯人が4人の

メロスの名を語ったからと言って、僕たちの誰かが犯人  
だと言う確証にはならないじゃないですか」

波

島「しかしその可能性は高いんじゃないのか、犯人がまるっ

きり関係のない人間だったら、どうしてわざわざ4人の  
メロスの名を語ったりするんだ」

諸

岡「そんなこと分かりませんよ」

波

島「今まで散々由加里さんのことを苦しめて、彼女のお母さ

んを爆弾小包で殺したのはお前等の中の誰かなんじやな  
いのか」

諸

岡「馬鹿げてますよこんなこと、いいですか、もし仮にそう

だったとしてもですよ、いくら何でも犯人は私ですって、  
自分から名乗る馬鹿が何所にいるんですか」

波

島「・・・なる程筋が通ってる。一応劇作家を自認するだけ

のことはあるようだな」

諸

岡「・・・」



早川「俺達の中にそんなことする奴がいる訳ないじゃないかよ。全くバカバカしい、3年振りに皆に会えたと思っただらそんな話かよ」

波島「3年も失踪していたアンタに何故そんなことが言えるんだ」

恵「ちよっと待って下さいよ、今結婚式の会場で爆破するって言ってましたよね、するとこの建物の中に爆弾が仕掛けられてるかもしれないってことじゃないですか、帰して下さいよ、何故私たちがこんなことに巻き込まれなきゃならないんですか」

諸岡「その通りですよ、帰らせてもらいますよ」

とドアを出ようとする三人。

三人の顔にハアアと毒息を吐きかけて行く波島。

苦しんで後ずさる三人。のたうつ。

早川「ちよっと何すんだよ」

恵「何をするんですか！」

毒息を武器に圧倒的に強い波島。

波島「俺はユカリクレイジーを絶対に許すことが出来ないし今日由加里さんと健二さんの結婚式は必ず成功させる。その為には何としても7時までには誰がユカリクレイジーなのかを突き止めなければならない、その為には悪いが全員この部屋から一步も外へ出ることは許さねえ、文句があるなら後で監禁罪でも何でも訴えろ、俺は正義の為にやらんぞ！」

早川「何が正義だよ、アンタは面白い番組作って視聴率を上げたいだけなんじゃないのか」

波島「ふん、何とでも言え」

と言ってポケットから鍵を出してドアに鍵をかけて  
しまう。

啞然として見守る一同。

波島はカメラを手にすると皆に向かって構える。そ  
の顔は嬉しそうにニヤリと笑っている。

バツと諸岡たちに土下座する須賀。

須賀に向かってカメラを回す波島。

須賀「お願いします、由加里が恐ろしいストーカーに命を狙わ  
れる様になったのは、由加里をスターにしてみました僕  
の責任なんです。犯人以外の方には申し訳ありませんが、  
誰がユカリクレイジーなのかを突き止めるまでここで協  
力して貰えないでしょうか」

早川「何を根拠に俺たちの中にユカリクレイジーがいるって言  
えるんだよ」

恵「そうですね、私たちは爆弾なんか作れませんよ」

波島「これは由加里さんから聞いた話だが、お前等かつて劇団  
青春座の研究生だった時に劇団の紹介でVシネマの制作  
のバイトをしたことがあるだろう、その時撮影現場で火  
薬を使った車の爆破をやってるな」

恵「そんな昔のことなんか覚えてないわよ」

諸岡「そんなのちよっと手伝っただけで実際に爆薬の扱い方な  
んか分かる訳ないじゃないか」

波島「だがやったのは事実だ」

早川「だから何だってんだよ、こんなのおかしいじゃんかよ、  
おい、止めるよカメラで撮影するの」

早川は波島のカメラを止めさせようとするが、波島  
にハアと毒息を吹きかけられて後ずさる。

諸岡「とにかくさっきのテープだけじゃ僕たちの中にユカリク  
レイジーがいると言う証拠にはなりませんよ。そもそも

そのテープだって、実際に由加里の部屋にかかって来た電話の録音なのかどうか怪しいもんだ」

波島「証拠は他にもある」

早川「それじゃそれを見せてみるよ」

波島「いや、それはまだ早い」

早川「どうして」

波島「番組には番組の段取りと言うモノがあるのだ、心配するな、番組が進行して行くにつれて追々と言う展開になって行くのだ」

早川「何が番組だよ、お前は俺達を見せ物にするつもりか」

波島「ヒッヒヒヒヒ……」

波島が孝子に目配せすると孝子は頷いてマイクを手にカメラの前に立つ。

孝子「驚くべきことが判明致しました。皆さん実はこの三人の

中に、一年前太田由加里さんのお母さんを爆弾で殺したユカリクレイジーがいると言うのです。それではまず、容疑者の皆さんを一人ずつ紹介したいと思います」

諸岡の前に立つ孝子。

孝子「こちらはかつて4人のメロスで座付き作家兼演出家として活躍されていた諸岡良和さんです。諸岡さんは4人のメロスが崩壊した後も売れないアマチュア小劇団で細々と活動を続けていらっしやいましたが、この恵さんとの間に子供が出来、演劇活動を行くことが困難な状況になってしまいました。そして断腸の思いで演劇活動から足を洗い、これからは真面目に働いて恵さんとの結婚生活に活路を見出そうと言うことになったのです」

諸岡にマイクを向ける孝子。

孝子「諸岡さん、貴方の様に幾つになってもうだつが上がり、  
ついいは夢に挫折して、出来てしまった子供の為に結婚  
すると言う妥協案で、自分を誤魔化さざるを得なかった  
アマチュア演劇人にとって、一人仲間を裏切って芸能界  
の桧舞台で活躍している太田由加里さんは、殺しても殺  
し足りない程憎い存在なのではありませんか？」

諸岡「・・・・」

続いて恵の前に立つ孝子。

孝子「こちらは諸岡さんの奥様でいらっしやいます恵さんです。  
彼女もかつては4人のメロスで活躍していた女優さんで  
したが、つい最近まで売れない作家である諸岡さんとの  
生活を支える為にしがえないレストランでウエイトレスを  
していました。子供が生まれた今は御主人が正式に籍を

入れ、真面目に働くようになったので恵さんは仕事を辞  
め、専業主婦として毎日子育てに追われていらっしやい  
ます（マイクを向け）どうですか恵さん、今貴方の送っ  
ている平凡でつまらない生活に比べて、芸能界での由加  
里さんの華やかな活躍振りが妬ましいと言う感情をお持  
ちになっていませんか？」

恵「（嘘）何を言っているんですか、友達の成功を祝わない  
人が何所にいますか」

孝子「なる程優等生の発言ですねえ、ですがこれは負け惜しみ  
にも聞こえます。と言うよりもそれ以外の何物でもない  
のではないでしょうか」

早川の前に立つ孝子。

孝子「こちらはかつて4人のメロスの主宰者であり、中心的な  
人物であった早川洋介さんです。彼は4年前、突然本番

をスッポかした由加里さんの為に急遽中止せざるを得なかった公演の負債を抱え込むことになってしまいました。そしてそれ以来、債権者からの取り立てに追われる身となって現在に至るまで逃亡生活を続けていらっしやいます。このメンバーの中では一番由加里さんを憎んでいると思われませんが、どうですか早川さん」

早川「……」

恵 「いい加減にして下さいよ！ 貴方はそこまで事情を知っているなら、何故ここまで私達が由加里のことを憎んでいるか分かるでしょう」

孝子「……」

波島はカメラを放すと孝子に手招きする。

鼻をつまんで側へ来た孝子にコンコンと何か耳打ちし、一本のカセットテープを渡す。

孝子「では皆さん、皆さんがユカリクレイジーではないかと疑われている、もう一つの証拠を、ここでお聞かせすることにしましょう」

とテーブルのデッキへ近付き、入っているテープを取り出すと、持って来たテープと入れ換える。

孝子「これは2年前ユカリクレイジーが由加里さんに付きまとい始めた頃にかかって来た、留守番電話の録音テープです」

再生ボタンを押す。

再び留守電に入った不気味な声の流れて来る。

声 「……ユカリ、オマエハイランダ、オレハシツテイルゾ、オマエガゲキダンノオトコタチフタリトミダラナカ

ンケイヲクリヒロゲテイタコトヲ、オマエハフジュンダ。  
ドウジニフタリノオトコトインビナカンケイヲタノシン  
デイタノダクソノオトコノナマエハ、ハヤカワヨウスケ  
トモロオカヨシカズデアールセナイ、ゼツタイニユル  
セナイ……」

早川と諸岡と恵「……（驚いている）」

孝子「由加里さんによれば、このことを知っていて言う人がいるとすれば、4人のメロスのメンバー以外には考えられないと言うことですが、事実はどうなのでしょうか」

早川と諸岡「……」

孝子「どうなんですか、早川さん、諸岡さん、貴方方二人は、当時二人とも由加里さんと肉体関係を持っていたのでは  
ありませんか」

早川と諸岡「……」

孝子「どうなんですか、貴方達二人はやったんですか、やらなかったんですか」

早川と諸岡と恵「……」

孝子「黙っていても分からないではないですか、さあ答えて下さい」

早川「そんなことアンタに関係ないだろう、なんで今頃になってそんなことアンタに追求されなきゃならないんだよ」  
孝子「私の考えでは由加里さんは貴方がたお二人の慰み物にさ  
れていたのではないかと思うのですが、どうなのですか」

早川「慰み物ってアンタ……」

恵「由加里は淫乱でどうしようもない女だったのよ、だから  
平気で仲間も裏切ったんじゃない」

諸岡「仕方ないですよ、だってあの頃は僕達二人とも由加里の  
ことが好きだったんだから」

恵「（傷付く）……」

諸岡「別に慰み物とかにはしてませんよ、それにそのことについて  
は今さらあいつにどうこう言う気もないですよ」

恵「（黙って諸岡の腕をガンガン叩く）」

早川「そもそもあいつは好きモノだったんだよ、一人の男じゃ満足出来ない身体だったんだからしょうがないだろ」  
須賀「黙れこの野郎！」

早川につかみかかって行く須賀。  
カメラを放し須賀を止めに入る波島。

波島「健二さん、健二さん落ち着いて、いけません、暴力は」

鼻をつまんで飛びのく須賀。

波島「(早川に顔を近づけ) いいか、暴力は禁止だ、分かったか！」

鼻をつまんでもがく早川。

諸岡「2年前にこの電話がかかって来たのなら、何故由加里はその時点で僕達のことを疑わなかったんですか、もし僕達の中に犯人がいるのだとすれば、その時点で僕等のことをよく調べていれば、お母さんは殺されずにすんだかも知れないじゃないですか」

須賀「僕は由加里から相談を受けてからずっとユカリクレイジ―と闘って来ました。でも由加里はこのことについては僕に何も話さなかったんです、このテープを由加里に聞かされたのもつい最近のことなんです。それが何故かは貴方がたにも分かるでしょう。このことを言えば貴方たち二人との過去がバレてしまうからです。貴方達、由加里がどれだけ苦しんだか分かりますか？」

諸岡「それは違うと思いますね、黙っていたのは由加里にもきつと僕等に対して後ろめたい気持ちがあったからだと思いますよ」

須賀「(怒り)何・・・」

孝子「私は貴方たち三人が協力してユカリクレイジーを演じているのではないかと思えます。貴方たちはストーリーカー行為を繰り返すことによって由加里さんをスターの座から引きずり降ろそうとしているのではないのですか、どうなんですか」

恵「(口惜しく)ふざけた事を言わないで下さいよ、一体何の権利があって貴方達は・・・私達は一切貴方達に協力なんかしませんからね」

波島に目配せする孝子。  
それに答えて頷く波島。

孝子「それでは今ここに、太田由加里さん御本人をお呼びしたいと思えますが、皆さん宜しいですか？」

恵「ふん、いいも何も、私達が何を言ったってそちらの思う通りにするんでしょうが」

波島「(須賀に)健二さん」

須賀「(頷き)」

ポケットから携帯を出してかける須賀。

孝子「では由加里さんと呼んでもよろしいんですね」

恵「いいわよ、勝手に呼べば良いでしょう!」

須賀は携帯を耳に暫らく呼び出し音を聞いているが、先方がなかなか出ない様子。  
一度切り、別の番号にかけ直す。

須賀「(携帯に)あ、スミちゃん、今第6控室にいるんだけどさ、悪いけど今すぐ由加里を連れて来てくれないかなあ、うん、まだ楽屋にいますと思うんだけど・・・えっ、いない? ドアに鍵は? かかってない!・・・おかしいな



あ、何所行ってんだろう・・・うん、ちょっとその辺捜してみてくれる？（携帯を切り波島に）おかしい、時間まで絶対に部屋から出ない様に言っといたハズなのに、僕以外の人間が来てもドアを開けちゃいけないって」

波島「・・・」

孝子「（不安そうに波島を見る）」

波島「（三人を見て）何だ、どう言うことなんだお前等」

早川「何だよ、俺達は何も知らないぞ」

須賀の携帯の着信音が鳴る。

須賀「（出て）もしもし、え、何所にもいないって、そんな馬鹿な、つい20分くらい前までそこにいたんだぞ（切り

）波島さん、皆で手分けして由加里を捜しましょう」

波島「健二さん、由加里さんは局のスタッフに捜させます。今はここにいて誰が犯人なのかを突き止めるのが先決です」

須賀「でも」

早川「ふざけるな、俺達の中に犯人なんかいないぞ」

波島「お前等、由加里さんを何所へ隠したんだ、言え」

早川「だから知らないって言ってんだろバカヤロウ！」

須賀「波島さん、もしものことがあったらどうするんです、何とかして下さい！」

と波島の腕を揺さぶる。

波島「健二さん、大丈夫です、心配しないで」

須賀「でも・・・」

何所からか小さくコンコンと何か金属の鉄板を叩く様な音が聞こえてくる。

須賀「何だ？」

コンコンと言う音、続く。  
一同不審に思い、辺りを見回す。

波島「何の音だ？・・・」

部屋の奥に置かれた掃除道具入れを見る須賀。  
コンコンと音続く。

須賀、近付いて行き、扉を開く。

中にロープで縛られて口をガムテープで塞がれ、身体中にダイナマイトを巻かれた太田由加里が椅子に座らされている。

由加里はウエディングドレスを着ている。

由加里は少しだけ動かすことの出来た足で道具入れの扉を内側から蹴って音を出していたのだ。

由加里に巻かれた無数のダイナマイトにはデジタル

の大きな表示盤の付いた時計が設置されており、後59分で爆発するカウントダウンの数字が表示されている。以降この表示は劇の進行するに連れて爆発までのカウントダウンを続けて行く。

孝子「キヤーツ！」

恵「由加里！」

早川「ばっ、爆弾だ」

驚いて立ち上がる一同。

須賀「動いちゃいけない！ 振動に反応して爆発する起爆装置もあるんだ」

早川「逃げる、爆発するぞ！」

ドアに向かって逃げようとする一同。

波島が立ち塞がり、ハアツ、ハアツと一同に毒息を吹きかけて蹴散らす。

諸岡「臭い！」

早川「苦しいっ！」

もがき苦しむ一同。

波島「ダメだ、ふざけんな手前らあ！」

早川「何言ってるんだよバカヤロウ、さっさと鍵を出せよ！」

波島「ダメだ」

再び出ようとする者を毒息でハネ飛ばす。

波島「誰もここから出ることは許さねえ！」

早川「死にてえのかテメエ！」

波島「文句があったら後で訴えろ、お前等の中に犯人がいることは間違いない、誰が犯人か突き止めるまで誰もここから出さねえからな、必ず由加里さんを助けてやる」

諸岡「いい加減にして下さいよ貴方、そんなこと言ってる場合じゃないんじゃないんですか」

孝子「(取り乱し) 波島さん！ 非常事態です、警察を呼んで下さい！」

波島「黙れ！」

孝子「(顔を歪めて鼻をつまむ)・・・だけど・・・」

波島「警察なんか呼んだら結婚式もブチ壊しだぞ！」

孝子「そんな、そんなこと言ってたって、今ここで爆弾が爆発すれば私達の責任は重大です」

波島「結婚式の中継が中止になるようなことになれば、それこそ俺達にとって取り返しが付かないことになるんだぞ、ゴールデンタイムの生放送が中止になると言うことが、どう言うことなのかお前にも分かるだろう！ いいか、

これは俺達が仕組んだ大勝負なんだ」

孝子「そんなこと言ったって・・・（震えている）」

波島「これ程のスクープが他にあるか、事件が解決してクライマックスは二人の盛大な結婚式だ、視聴者はテレビに釘付けになるぞ」

孝子「（必死に返事をする）は・・・はい・・・」

波島「しっかりしろ・・・いいいな」

孝子「は、はい」

恵「貴方達、狂ってるわよ」

波島「うるせえ」

由加里の間近にいる須賀。

須賀「由加里、何も心配することないんだからね、僕が絶対に助けてあげるからね、実は僕、会社の研修で自衛隊にいたことがあるんだ。その時爆弾処理のことも勉強したこ

とがあるから、きっと助けてあげるからね・・・いいかい、決して動いちゃいけないよ」

由加里「（涙を流して頷く）」

須賀「（見て）これは・・・巧妙に作られた時限装置だ、起爆装置からタイマーに繋がれたコードが4本もある、波島さん、ハサミを持っていますか」

波島「ああ」

とウエストバッグからハサミを出して須賀に渡す。

須賀「（ハサミを持って）本物の一本を切ればダイナマイトから切り離して爆発を防ぐことが出来るけど、あとの3本はおそらくダミーなんだ、間違って切れば途端に爆発する・・・」

固唾を飲んで見守る一同。

須賀「ちくしょう、分からない、どれが本物のコードなんだ・  
・」

早川「おい、アンタ、ヘタに触らない方が良いんじゃないのか」

須賀「この電気信管は映画やテレビの撮影で拳銃とかに使われ  
ているのと同じ物です・・・（諸岡たちを見る）」

恵「私達じゃないって言うてるじゃないですか」

須賀「ちよっと、皆さん手伝って下さい、この箱の裏側にも起  
爆装置が仕掛けてあるのかもしれない（ハサミをテーブ  
ルに置く）」

誰も動こうとしない。

波島「おい、手前ら、手を貸すんだよ」

仕方なく側へ寄って行く早川と諸岡。

カメラを構える波島。

須賀「良いですか、道具入れをそっと前へ引き出すんです、良  
いですか、そっつとですよ、あ、待って、その前に」

と道具入れの前にあるテーブルを下手へ退ける。  
道具入れに力を入れる三人。

須賀「良いですか、くれぐれも振動を与えないように、振動に  
反応して爆発するマグネットスイッチが仕掛けられてい  
るかも知れません」

そっと舞台前方に道具入れを引き出して行く三人。  
道具入れの裏を覗き込む須賀。

須賀「裏には何も無い様だ・・」

波島に後押しされて側へ来る孝子。

波島「さあ、由加里さんに語りかけるんだ」

勇気を出して由加里に語りかける。

孝子「・・・由加里さん、良いですか、私の言うことにイエスカノーで答えて下さい」

由加里「・・・」

孝子「頸をそっと縦か横に振ってくれれば良いんです、良いですか？」

由加里「(頸をそっと縦に振る)」

孝子「貴方を縛ってここへ連れて来た人は誰ですか？ その人はこの中にいますか」

由加里「(頸を横に振る)」

孝子「えっ、いないんですか？ 貴方を連れて来た人はここにはいない人なんですか？」

由加里「(頸を横に振る)」

孝子「どういうこと？ (考えて)・・・そうか、貴方は薬か何かで眠らされてここへ連れて来られたんですね、だから貴方を連れて来た人の顔を見ていないと言う事ですね？」

由加里「(頷く)」

孝子「・・・そ、それじゃ皆さん、皆さんに聞きますが、まず諸岡さんと恵さん、貴方がたお二人は波島プロデューサーに連れられてこの部屋に来る前は何所で何をしていたのですか？」

恵「そんなこと貴方に答える義務はないでしょう」

孝子「もうこう言う事態になってしまったのですから、私達に協力して下さいませんか？」

恵「・・・私は実家へ行って子供を預けた後一人で渋谷で買い物をしてました。私がさっきまで渋谷にいたことを

証明出来る人は誰もいません。でも駅のコインロッカー  
に買い物した来た品物は入っていますから、確かめて貰  
うことは出来ます」

孝子「・・・それでは確かなアリバイとは言えませぬね、御主  
人の諸岡さんはどうですか、奥様とは行動を共にしては  
いらっしやらなかつたのですか、貴方はここへ来る前何  
処で何をしていらしたのですか？」

諸岡「僕はこの近くに良い喫茶店や飲み屋がないか探していま  
した。今日もし早川と会えたら、後で一緒に行こうと思  
っていましたから」

孝子「誰かそれを証明出来る人はいますか？」

諸岡「いません」

孝子「では早川さんはどうですか？ 貴方は番組出演の為に局  
へ来る前までは何処で何をしていたのですか？」

早川「俺は番組を疑つてたからなあ、ここへ来たら追つて来た  
債権者に捕まるんじゃないかと思つて、実は約束の時間

より2時間も早く来て3階の便所に隠れてたんだ」

孝子「つまりこう言うことですね、貴方たち三人はここへ来る  
前のアリバイがまるつきりないどころか、お互いにお互  
いのアリバイを証明することすら出来ない」と

恵「だからどうだつて言うんですか」

孝子「・・・」

須賀「皆さん・・・」

一同「？」

須賀「ここで僕から、この三人が一緒についている重大な嘘を、  
暴きたいと思ひます」

諸岡「・・・今度は何ですか」

須賀「(由加里に) 由加里、何も心配しなくて良いんだからね、  
安心して僕に本当の事を言えば良いんだからね、分かっ  
たね」

由加里「(頷く)」

須賀「由加里、いいかい、良く見るんだ、この人(と早川を指

し) この人は自分で早川洋介だと言ってるけど、本当は別人だろう？」

早川「何を言い出すんだよアンタは」

須賀「いいからアンタは黙っててくれ、さ、由加里、良く見るんだ、この人は早川洋介さんじゃないよね」

由加里「(頸を横に振る)」

須賀「えっ？ 違うって？ それじゃこの人は本当に早川さんだと言うのかい？」

由加里「(頷く)」

早川「それみろ」

須賀「そんな馬鹿な、由加里、何でそんな嘘をつくんだ」

早川「嘘じゃねえだろ、なんでアンタはそんなこと言うんだよ」

須賀「実はねえ、僕は5年前にアンタたちの公演を見てるんだ」

早川「なに？」

須賀「このことは由加里にも黙ってたけど、僕は由加里がドラマのヒロインとして抜擢されることが決まってから初め

て会った訳じゃないんだ。実は4人のメロスの舞台で初めて由加里を見たんだ。その時の舞台上で僕は早川さんを見た。貴方は早川さんじゃない」

早川「勘違いじゃないのか」

須賀「違う」

早川「何故以前に4人のメロスの舞台を観たことを黙ってたんだ？」

須賀「そんなことはどうだっていいじゃないか」

早川「良くない、何故今まで由加里にそのことを隠してたんだ。アンタは本当に舞台を観たのか」

須賀「観たさ、それにな、もう一つアンタが早川洋介ではない確かな証拠がここにあるんだ」

とポケットから手紙らしき封筒を出す。

須賀「これは今朝テレビ局に届いた、早川洋介さんから僕に宛



「てられた手紙です」

早川「何だと？」

須賀「まさかこれは貴方が書いた手紙じゃないでしょう、何故ならこの手紙の差出人は今東京拘置所に拘留されているんですから」

早川「なっ・・・」

須賀「今ここでこの手紙を読みたいと思いますが、宜しいでしょうか」

孝子「はい、ではその手紙を読んでみて下さい」

手紙を広げて読もうとする須賀。

須賀の口もとにマイクを持って行く孝子。

須賀「（読む）拝啓。私はかつて4人のメロスと言う劇団で太田由加里と共に活動していた早川洋介と言う者です。劇団はあんなことになってしまいました。私には今も輝

かしい思い出として生きる勇氣に繋がっております。お恥ずかしながら保険金詐欺と言う犯罪を犯した容疑で現在裁判所で係争中の身の上ですが、太田由加里が結婚すると言う噂を聞き、懐かしいやら嬉しいやらでいても立ってもいられなくなり、お恥ずかしながら婚約者である貴方様にこの様な手紙を書いてしまった次第で御座います。由加里はともすると手に負えないくらい気性の激しいところもありますが、本当に可愛いくらい気性のある女です。この様な身の上の自分に何を言う資格も御座いませんが、どうか由加里を幸せにしてやって下さい。何卒宜しくお願い申し上げます。それから、願わくばこの手紙のこと、ましてや私が犯罪を犯して拘置所に拘留中であることを由加里には内密にして頂きますよう、お願い申し上げます」

手紙をたたんでしまう須賀。

三人「……」

須賀「裁判所に問い合わせてみたところ、確かに早川洋介さんは保険金詐欺の容疑で現在刑事裁判係争中であることが確認出来ました。だとすれば今ここにいる貴方、自分は早川洋介だと名乗る貴方は一体誰なんですか、そもそも後の二人も始めからこの人が早川洋介ではないと言うことを分かっていたはずです。なのに何故この人が本物の早川洋介であるフリをしていたんですか、貴方たちは一体何を企んでいるんですか……」

三人「……」

孝子「由加里さん、貴方はこの三人に拉致されたものではありませんか、そして本当のことを言ったら殺すとこの人たちに脅かされているではありませんか」

由加里「……」

早川「……分かりました。もうこうなっては仕方がない。俺

から本当のことをお話することにしましょう」

諸岡「そんな、ちょっとあなた……」

早川「（目配せし）いいから、俺に任せて、時間がない、ここは慎重に行動しなければ、由加里さんの、嫌俺達全員の命が掛かってるんだ」

諸岡「……」

早川「御指摘の通り俺は早川洋介ではありません。私立探偵をしております、武崎啓一と申します（以降早川洋介は武崎啓一と改名）」

須賀に名刺を差し出す武崎。

孝子「私立探偵？」

武崎「はい、実は一月程前に太田由加里さんから御依頼を受けまして、ある調査をしております」

孝子「その調査と言うのは」

武崎「由加里さんの母親を殺したユカリクレイジーの正体が、由加里さんのフィアンセである須賀健二さんではないかと言っ疑いです」

須賀「何？ 何だって！（と仰天して由加里を見る）」

それまで諸岡達に向けられていたカメラが、クルリと向きを変えて須賀の方に向けられる。

武崎「俺の目的は貴方をこういう状況に追い込んでカメラの前で正体を暴くことでした」

須賀「一体何を言ってるんだ貴方は」

武崎「その為に諸岡さん御夫婦にも協力を依頼したんです。と言っても、俺は今日まで諸岡さんたちが本当に来てくれるかどうか心配だったんですが、何しろ御夫婦は由加里さんのことを死ぬ程憎んでいらっしやるから」

諸岡と恵「……………」

武崎「諸岡さんたちが由加里さんと会うのは、4年前由加里さんが4人のメロスの公演初日に失踪して以来、初めてのことですね」

恵「はい……………」

諸岡「（頷く）はい」

武崎「今日は本当に良く来て下さいました」

諸岡と恵「……………」

武崎「こんな状況で由加里さんと再会することになるうとは思いませんでした。諸岡さん、巻き込んでしまっって申し訳ありません……………」

諸岡「いえ、そんな……………」

須賀「貴方は一体何を言ってるんですか」

武崎「須賀さん、貴方は期せずして自分が実は5年前の4人のメロスの公演を見て、その時初めて由加里さんを見たと言っことを言いましたね、何故そのことを今まで由加里さんに隠しておいになったのですか」

須賀「そんなことどうだって良いじゃありませんか」

武崎「いや良くない、実はその時から貴方は密かにストーリーカーとしてずっと由加里さんのことを付け狙っていたのではないんですか」

須賀「ふん、何をバカな。そもそも由加里が僕をストーリーカーだと疑って探偵に捜査を依頼したりする訳がないじゃないか」

武崎「由加里さん、貴方は俺に須賀さんの身辺調査を依頼したことに間違いありませんね？」

由加里「・・・（頷く）」

須賀「そんな、そんなバカな、由加里、何故なんだ？」

武崎「須賀さん、貴方は由加里さんが密かに持っていた4人のメロス時代の写真を由加里さんのアルバムから剥がして盗みましたね？」

須賀「なに？」

武崎「貴方は由加里さんがかつて早川さんと諸岡さんの二人と

もと肉体関係があったと言うことを、もうずっと前から知っていたのではないんですか」

須賀「・・・そんな訳ないだろう」

武崎「貴方は由加里さんを溺愛していた。それこそ由加里さんのすることには何に対しても反対したり咎めたりするとは全くなかった。なのに何故由加里さんが密かに持っていた4人のメロス時代の写真、それも早川さんと諸岡さんが写っているモノだけを剥がしておしまいになったんですか」

須賀「知らない、僕はそんなことしてないぞ」

武崎「始めは由加里さんも自分がいない隙に勝手に部屋に入り込んだユカリクレイジーの作業だと思ったそうなんです。偶然にも貴方の鞆の中に無くなった写真が入っているのを発見してしまっただけです」

須賀「嘘だ、そんな、それは何かの間違いだ」

武崎「これがその写真です（ポケットから出して見せる）これ

は由加里さんから預かりました。それまでにこの写真を貴方に見せたことは一度もなかったそうです。俺が調べたところこれには確かに貴方の指紋が付いていました」

須賀「そんな・・・由加里（と見る）！」

由加里「・・・」

武崎「誤解しないで下さい須賀さん。由加里さんはまだ貴方のことを愛しているし、信じたいと思っていらっしやいます。ただそんなことがあった為に疑いを抱いてしまったんです」

須賀「バカな・・・」

由加里「（涙を流して須賀を見つめている）」

武崎「貴方のことを心から愛している一方で母親を殺した犯人かも知れないと言う疑いを抱いてしまった由加里さんの苦しみを分かってあげて下さい。由加里さんは女優としての才能を見出してここまで育ててくれた貴方に、心から感謝していらっしやいます」

須賀「・・・」

武崎「ユカリクレイジーに苦しめられていた由加里さんにとって、貴方は唯一信頼出来る頼りになる人間でした。ただ貴方が由加里さんの昔の写真を盗むなんてことは、それまで由加里さんが思っていた貴方からは考えられない行為だったんです」

須賀「馬鹿な、そんなことは馬鹿げてる、これはきつと誰かが仕掛けた罠なんだ」

武崎「最初の頃のユカリクレイジーのストーカー行為は、卑猥な言葉の留守番電話へのメッセージや由加里さんを隠し撮りした写真を送りつけたりすることでしたが、それに対して貴方は由加里さんを密かに引っ越しさせましたね。ところが引っ越したその日にユカリクレイジーは居所を突き止めて電話攻撃や盗撮攻撃をして来ました。止む無く由加里さんは長い間疎遠になっていた一人暮らしのお母さんとの同居を決めた。ところがその途端にお母さん

は送られて来た小包に仕掛けられた爆弾で殺されてしまった。そして最後はテレビヤマトの寮に入って、そこでは24時間の警備体制をひかせることにしました。しかし驚くべきことにそれでもユカリクレイジーは警備の眼をかいくぐって由加里さんの部屋に入り込み、下着を盗んだり盗聴器を仕掛けたりしました。その時の警備担当者に話を聞きましたが、そんなことが出来るとは考えられなかったそうです。もし出来る人間がいたとすれば警備の状況や内部の事情を知っていたに違いないと。由加里さんは貴方に同居して欲しい、24時間一時も離れず側にいて欲しいと願いました。そして貴方と同居を始め、ついには結婚するに至りました」

須賀「・・・」

武崎「貴方はユカリクレイジーとして由加里さんを苦しめる一方で、由加里さんをユカリクレイジーから守る良き相談者として、由加里さんの信頼と愛情を得ようと思ってい

たのではないんですか」

須賀「言いたいことはそれだけか・・・」

武崎「貴方はどうしても由加里さんを自分の手元に置いておく為に、由加里さんのお母さんを殺したのではないんですか」

須賀「名誉毀損で訴えてやる」

武崎「由加里さんから須賀さんのことを調べて欲しいと頼まれた俺は貴方の身辺調査を開始しました。貴方がユカリクレイジーであることの手掛かりが何かつかめると思ったからです。しかし貴方は実に周到と言うか慎重で、全くと言って良い程何の手掛かりも残していませんでした」

須賀「当たり前だ」

武崎「そこで今回の計画を思いついたんです。由加里さんとしてはどうしても貴方との結婚式を挙げる前に白黒を付けなければならなかった。かと言って貴方の何処を調べても白か黒かの確たる証拠を発見出来ない。そうこうして

いるうちにも結婚式の日にはほとんど迫って来る。そう言う訳で俺としては苦肉の策だったんです」

須賀「そんな・・・ハナから由加里もその計画に参加していたと言うのか」

武崎「そうです」

須賀「(由加里を見て) そんな・・・馬鹿な、由加里・・・本当なのかい？」

由加里「(泣きながら頷く)・・・」

須賀「そんな・・・何て馬鹿げたことを・・・」

ガツクリと膝を着いてうな垂れてしまう須賀。

武崎「全てはこの状況に貴方を追い込む為でした。まず諸岡さん夫婦に早川さんの搜索を波島プロデューサーの番組に依頼して貰い、俺が早川さんとして現れる。時を同じくして由加里さんは貴方に結婚式に4人のメロスのメンバーを集められないかと頼む。波島さんは結婚式の中継のプロデューサーでもあるからきつと早川さんを引き合わせる日を今日にして、俺の迷惑通りに事を運んでくれると思っただんです。ただ一つの誤算は、由加里さんがこんな状況になってしまったことです」

須賀「馬鹿野郎！ お前のせいだ！ 由加里にもしものことがあつたらどうしてくれるんだ！」

武崎「・・・」

須賀「由加里・・・お前が僕を疑っていたなんて・・・なんて馬鹿なんだお前は・・・」

由加里「(泣いている)・・・」

武崎「ところで須賀さん、貴方はさっき自分で昔自衛隊にいたと言いましたが、何故そのことも今まで隠していたんです」

須賀「隠していた訳じゃない、自衛隊には研修として父親に無理矢理行かされたけど、途中で嫌になって逃げて来てし

まったから、恥かしいから話さなかっただけだ」

武崎「その時貴方の教官だった高井さんは爆弾処理のエキスパートでしたね、貴方は高井さんから爆弾について個人的に詳しいレクチャーを受けている」

須賀「それはたまたま興味があつたから教えて貰っただけだ。実際に自分で爆弾を作ろうだなんて思う訳ないじゃないか！」

武崎「それから依然として疑問なのは、何故貴方はかつて4人のメロスの公演を観たと言うことをそれ程までに隠していたかと言うことですが」

須賀「（観念して）・・・分かりました・・・それではもう仕方がない、本当のことをお話することにします・・・実は、4年前由加里が突然本番当日にメロスの公演をストップかして局のオーデイションを受けることになったのは、僕の差し金だったんです」

武崎「どういうことですか？」

須賀「僕は、メロスの公演を観た時点で由加里のことを見初めました。そこでどうしても局で企画していたドラマのヒロインに由加里を抜擢したかったんです。だからその時ディレクターだったこの波島さんに頼んだんです。そして由加里にはドラマのヒロインと言うことをエサにして、わざと4人のメロスの公演初日にオーデイションに来るようにと言ったんです。オーデイションと言っても簡単な面接をするだけだったんですが、何故それを敢えてメロスの公演当日にしたかと言うと、僕としては後々嫌でも関わりを断たなければならぬ由加里とメロスとの関係を、早いうちに決定的な形で切っておいた方が良いと思っただけなんです」

諸岡「何だって！ 卑怯者！ その為に僕達がどんな思いをしたか分かっているのか！ 早川も！」

諸岡が須賀につきかみ掛かって行く。



慌てて止めに入る波島と武崎。  
臭いので散り散りに離れる諸岡と須賀と武崎。

須賀「(荒い息) ちょっと、波島さん、何とか言っして下さいよ  
・・・」

波島「頑張っ！ 闘うんです、自分の力で身の潔白を証明するのです！ そしてラストは愛を証明する結婚式でクラ  
イマックスですよ！」

と須賀にガッツポーズをすると自分は再びカメラを  
回す。

孝子「ちょっと待って下さい武崎さん」

武崎「？」

孝子「何だか話がおかしくありませんか？」

武崎「何がですか？」

孝子「須賀さんは絶対に犯人じゃありません」

武崎「え？」

孝子「だってもし本当に須賀さんがユカリクレイジーで、お母  
さんを殺してまでして由加里さんの愛を得ようとしてい  
たと言うのなら、何で今こんなことをするんです」

武崎「へ？」

孝子「やっと念願叶って由加里さんの愛を手に入れて結婚にま  
で漕ぎ着けた今になって、こんなことをする訳がないで  
しょう、こんなことをして自分の結婚式をブチ壊しにす  
る訳がないじゃありませんか！」

間

武崎「そうか・・・」

須賀「そうだよ、アンタはこれも僕がやったって言うのか」

武崎「・・・」

須賀「僕がやったなら今すぐやめれば由加里は助かるじゃないか」

武崎「・・・なる程！」

諸岡「え？（と見る）」

武崎「（手を叩く）いや、その通りだ・・・」

孝子「貴方バカじゃないんですか」

須賀「そうだよ馬鹿馬鹿しい、アンタは全く何を言い出すかと思えば、僕が由加里をこんな目に合わせて何になると言うんですか」

武崎「その通りだ！・・・そうか、貴方は皮肉にも由加里さんがこんな状況になってしまったことで、自分の身の潔白を証明することになったんですね」

恵「そんな武崎さん、それじゃ一体誰が犯人だって言うんですか」

武崎「分からない」

恵「そんなあ！」

武崎「うーん（困惑し）それじゃあ、やっぱりメロスのメンバーなのかなあ・・・」

恵「え？（と諸岡と顔を見合わせる）」

武崎「早川さんは半年前から拘置所に入ってるから、あと残るのは・・・（と諸岡と恵の顔を見る）」

再びカメラがクルリと回って諸岡と恵に向けられる。

恵「そんな、私達二人のどちらかが犯人だって言うんですか？」

諸岡「そんなバカな」

孝子「二人の共犯と言うことも考えられます」

恵「そんなの酷いですよ武崎さん、須賀さんが犯人に間違いないから協力してくれって言うから私達は協力したんじゃないですか」

武崎「・・・」

須賀「（二人に）早く、今すぐ爆弾を取り外せ！」

恵 「違う、私たちじゃない」

須賀 「旦那が一人でやったんじゃないのか」

恵 「そんな訳ないでしょう!」

孝子 「待って下さい、だとしたら何故二人はユカリクレイジーの正体を暴くと言う武崎さんの計画に協力したのでしょうか、自分たちに疑いが行くと言う可能性を考えなかったのでしょうか」

須賀 「そんなの断れば却って自分たちが疑われると思ったからに決まってるじゃないか」

孝子 「でもそれじゃここで一緒に死ぬつもりなんですか？ だってあと28分もすれば爆弾は爆発して、私達共々死んでしまうんですよ」

須賀 「元々死ぬつもりで来ているのかもしれない」

武崎 「そうだ、さっきの脅迫電話では自分も自爆するって言うってたからな」

恵 「違う、私達じゃないって言ってるじゃない」

孝子 「恵さん、先程の話を聞いて私は同じ女として心からの同情を感じました」

恵 「大きなお世話ですよ」

孝子 「もし貴方が犯人と分かっても、貴方が犯行に及んだ動機に関しては世間一般からも沢山の同情の声が寄せられると思います」

恵 「だから違うって言ってるじゃないですか！ 私がこんなこととしてどうするって言うんですか、私がこんなことしたら赤ちゃんはどうなるのよ、信じられないあり得ないこと言わないで下さいよ!」

須賀 「諸岡さん」

諸岡 「(見る)」

須賀 「諸岡さん、貴方の方こそまだ由加里に未練があるんじゃないんですか？」

諸岡 「(黙ってしまう)・・・」

恵 「良和？・・・」

諸岡 「・・・」

恵 「良和・・・」

諸岡 「・・・」

孝子 「やはりこの惨めな二人の共犯なのでしょうか」

恵 「うるさい！」

と孝子のマイクにつかみ掛かって行く。

恵を止める諸岡、後からつかまえて孝子から引き離す。

諸岡 「止めろっ」

恵 「放してよっ・・・良和、そうよ貴方あの時、もし由加里が突然いなくなったりしなかったら、良和たちずっと早

川さんと三人で付き合ってたんじゃないの、そうよ、そして私なんか一生相手にされなかったのよ」

諸岡 「何を言い出すんだよ今更、もう止めなよそんな昔の話は」

孝子 「諸岡さん、やっぱり貴方と早川さんはお二人共由加里さんと肉体関係があったんですね」

諸岡 「・・・」

孝子 「貴方たち四人に何があったのですか、この際洗いざらい話してしまっただけはいいですか」

諸岡 「何もそんな難しい話じゃないんです、僕たちは由加里と早川と僕と、二対一で付き合ってたんだ。それだけの事なんです」

孝子 「それだけのことって・・・」

諸岡 「そうですね、それで足りなけりや貴方の好きな様になんとも表現すれば良い、僕と早川は二人で由加里のことを慰み物にしていたんでしょう、そうですねその通りです」

須賀 「何だとこの野郎」

孝子「（諸岡に）そんな言い方をしてしまっってはますます奥さんが可哀そうではありませんか」

恵「私・・・最初にメロスの公演を打った時、すごく良い仲間たちと巡り会えて良かったなあって思った。青春座を辞めさせられた時は絶望的な気持ちになったけど、四人でメロスを結成して初めて公演を打った時、ああ、私達にもこんなことが出来るんだーって思った。お客さんの拍手貰った時、私達が力を合わせれば出来ないことなんかないんだって思った。今まであんな感動したこと一度もなかったよ」

諸岡「そりゃ、僕だって」

恵「それが、何だよ・・・由加里が公演をスッポかしたりしなければ、私達あのまま劇団続けて有名になってたかも知れないのに、今でも皆で友達でいられたかもしれないのに・・・」

諸岡「あのままではいらなかったから由加里は公演をスッポ

かしたんじゃないか」

恵「・・・」

諸岡「由加里が公演をスッポかしたのは、僕と早川にも責任があるんだ」

恵「そんな、あの後私達がどんな思いをしたか忘れたの？来てくれたお客さん皆に一日中謝り倒して、お詫びの手紙を一体何百通書いたと思ってるのよ」

諸岡「悪いのは由加里だけじゃないよ」

恵「良和はそう思いたいんですよ、早川さんだってそう思いたかったから黙って一人で借金背負っていなくなっただけじゃない、だけど私はどうなるのよ、そんなこと私には全然関係なかった」

孝子「可哀そうな奥さん」

恵「うるさいわよ！」

諸岡「お前には一番悪かったと思ってるよ」

恵「だけど皆が一緒に抱いていた夢を一人でブチ壊しにした

由加里のことは、私絶対に許せない」

諸岡「・・・由加里は父親がいなくなって、母親とも折り合いが悪かったから、いつも一人ぼっちだったけど、本当はひどい寂しがりやで弱い女だったんだ。そういう宿命を背負って生きて来た女なんだ。男にとっては決して自分だけのモノにならない女、でもこいつが困っていると聞けばいつでも行って助けてやりたくなる女だったんだよ」

恵「私何で貴方なんかと結婚したんだろう」

諸岡「・・・」

恵「良和は何で私と結婚したの？ 子供が出来たから仕方なく？」

諸岡「やめなよそんな言い方は」

恵「私と結婚して芝居を辞めたけど、本当はまだやりたいたいじゃないのって聞いたことあったよね、そしたら良和、もう精一杯やったからいいんだって言ったよね」

諸岡「・・・」

恵「あの言葉は本当なの？ 本当は良和、芝居を辞める言い訳が欲しかっただけなんじゃないの？ もう気力も自信もなくなっちゃったけど自分から芝居を辞めることが出来なくて、子供が出来たことで芝居を辞める良い口実が出来たから、私と結婚してくれたんじゃないの？ 相手は別に私じゃなくても良かったんじゃないの？」

諸岡「止めなよ」

恵「・・・」

間

須賀「（切羽詰まって）ちょっとアンタたち、もういい加減にして下さい！ もう時間がないじゃないですか！ 武崎さん、貴方探偵なんですよ何とかして下さいよ早く！」

恵「こんなことになるなら、武崎さんの計画に協力なんかしななきゃ良かった」

武崎「面目ない……」

恵「良和にとって私の存在は、夢に挫折して生きて行く為の言い訳なの？」

諸岡「……」

恵「私は良和にとって今まで挫折してきたこと全ての最後の妥協案なんだ」

諸岡「……」

恵「私そんなの嫌だよ！ 良和が今まで探して来た恋や夢全てに妥協した結果が私だなんて絶対に嫌、私は頑張って自分のやりたい事に没頭してる貴方のことが好きだったんだもの」

間

諸岡「……ふっ……ふふふふ……」

諸岡を見る一同。

諸岡「ふふふふ……ふっふふふ……（豹変）ふっ、ふははは……やっぱりこうなったか」

恵「……」

諸岡「僕にも分かってたよ、やっぱりダメだったんだ。赤ちゃんが出来て、結婚して働き始めてすぐ思ったよ、ああ、これは、この生活はきつとダメになるなあって、僕には遅かれ破綻することが分かってたよ……ダメだったんだよ、毎日仕事していると、苦しいのに、自分の行きたいのとは違う方向に歩いていかなきゃならない自分がいて……もう耐えられないよ、嫌だよこんなこと、こんなことなら死んだ方がよいよ……違う！ こんなハズじゃなかった。僕は違う、僕は自分に嘘をついている！ こんなのは僕の人生じゃない！」

様子が変わった諸岡を驚いて見る一同。

武崎「・・・諸岡さん、もう止めましょう。こんなことして何になるんです」

諸岡「・・・」

武崎「由加里さんを殺したって、貴方の人生が変わる訳じゃないじゃありませんか」

諸岡「・・・」

武崎「さあ、早く、コードを切って爆弾の時限装置を取り外して下さい」

とテーブルのハサミを取って諸岡に渡そうとするが、  
諸岡は動かない。

武崎「さあ諸岡さん、あと20分しかありません。どのコードを切ったら良いんですか、赤か、青か、黄色か、緑か、

どれなんです」

諸岡「(見る)」

一同「・・・」

諸岡「(黙って武崎からハサミを受け取る)」

恵「!?!? そんな・・・良和!」

爆弾に向かう諸岡。

恵「良和! そんな、本当に貴方が犯人なの!?!」

諸岡「皆さん見て下さい」

諸岡は時限装置の配線から一本のコードを引っ張り、  
ハサミで切ろうとする。

諸岡「このコードを切ると、その瞬間に爆弾は爆発します」  
武崎「おい!」



須賀「馬鹿、やめろ！ やめてくれ！」

諸岡「僕に近付かないで下さい」

恵「何で？ どうしてなのよ良和！」

諸岡「・・・あの時、4人のメロスの第三回の公演が無事に上演されていけば、僕達は皆世の中に打って出ることが出来たんです。それを由加里は自分だけの為に潰した。皆の夢をないがしろにして、自分だけの夢を実現させたんです。僕が演劇と言う物に、どれだけ打ち込んでいたと思ってるんだ。誰にも人の夢を奪う権利なんかないハズだ。許せない、絶対に許せない」

恵「由加里を殺して何になるの？ 貴方が犯罪者になるだけじゃないよ」

孝子「波島さん、警察を、警察を呼びましょう」

波島「ダメだ、何やってる、レポートしろ！」

孝子「貴方も狂ってますよ！」

波島「その通りだ、早く奴に質問しろ！」

と言いつつもカメラを構える波島の手はブルブル震えている。

諸岡「良いですか皆さん、僕が今この線を切れば、その瞬間にここにいる全員が死んでしまうんですよ、良いですか、良く聞いて下さい。今から僕がお話することを全国に放映するのです」

波島「分かった！ 分かったから何でも喋ってみろ！」

諸岡にカメラを向ける波島。

ここからの諸岡は何か憑かれた様に狂った形相で語り始める。

諸岡「よろしいですか皆さん！ 今はまだ僕は誰にも知られておりませんが、後に世界中に知れ渡る程の才能の持ち主

です。僕の書き残した脚本を残らず読んでみて下さい。僕の部屋にあります。こうすることで僕の才能は始めて世に知れ渡ることになるのです」

孝子「諸岡さん・・・何か話がおかしくありませんか、ユカリクレイジーは由加里さんを愛していたのじゃありませんか、それがどうしてなんです、由加里さんをこんな目に遭わせてしまうなんてユカリクレイジーらしくないじゃありませんか」

武崎「それはストーカーの歪んだ愛情表現の表れです。自分の愛情を素直に表現することが出来ない。ともすればそれは一瞬にして殺したい程の悪意に転ずるのです」

諸岡「黙りなさいヘッポコ探偵は！」

武崎「・・・」

孝子「今までのユカリクレイジーの行為は他の有名人や相手に自分の好意を伝えられない一般的なストーカーと同じ、悪戯電話や盗聴等の嫌がらせだったはずです。それがど

うして今になって由加里さんが自分たちを犠牲にして女優になったことを持ち出したのです。今まではそんなこと一言も言わなかったはずです」

諸岡「・・・」

孝子「貴方本当はまだ、由加里さんのことを愛していらっしやるではありませんか？」

諸岡「違います。この人は僕達の友情をアダで返して、しかも僕の才能を踏みにじることによって自分の成功を手に入れたのです」

恵「良和、やめてよ」

諸岡「僕はこの女と一緒にこの世から消えます。僕の有り余る才能を世間から抹殺してくれたこの女が、女優として活躍し続けるなどと言うことは決して許されてはいけないことなのです」

恵「やめてお願いだから・・・」

諸岡「貴方たちに分かりますか？ どれ程辛い苦勞をしても、

類いまれなる才能を持っていながら誰にも相手にされることもなく、世界に正当な評価を受けることもなく雑踏の中に埋もれて行ってしまふ僕の気持ち、こんなことなら、こんな才能なかなければ良かったんです。何故僕は生まれて来たのか、僕はこのまま意味もなく消えて行くだけなのか、こんなことなら僕は生まれて来なければ良かったじゃありませんか」

恵 「・・・」

諸岡 「さあ由加里！ 僕に命乞いをするのです。カメラの前で、自分のしたことを心から悔いるんです。そうすることで貴方は救われるし、僕の才能が人々に知れ渡ることになるのですから」

諸岡は由加里の口に張られたガムテープを剥がす。

由加里 「お前に才能なんかねえよバカヤロー！ 冗談じゃねえよ

！ あつたら今頃もっとどうにかなってるはずじゃないかよ、バカじゃねえのか！ アンタねえ、これ以上自分を惨めにしたくなかったら私のこと早く放しなさいよ」

須賀 「（慌てて）よせ由加里、こいつを刺激するんじゃない」

由加里 「私は死んだって全然構わないよ、私はねえ、ここで死んだってずっと伝説の女優として名前が残るんだよ、アンタなんか永遠のクズとして蔑まれて行くだけじゃないか」

諸岡 「言いたいことはそれだけですか？」

由加里 「いい加減に自分の才能の無さに気がついたらどうなんだよ！ いいか、私はアンタ等を裏切った訳でも自分だけが可愛かった訳でもなんでもないよ、ただ私には才能があった。でもアンタたちには無かった。それだけのことがどうして分からないんだよ」

恵 「良和、こんな女殺しちやいなよ」

諸岡 「・・・」

恵 「早く、その線切って！ こんな女木っ端微塵に吹っ飛ん

じゃえば良いのよ!」

由加里「上等だよ、やってみろ、さあ早く、やってみろよ早く!」

武崎「よせ、やめろ! 由加里さん、貴方もちよつと言い過ぎなんじゃないのか」

由加里「うるせえボンクラ探偵、大体テメエが無能だからこんなことになるんじゃないかよ」

武崎「何だって・・・」

由加里「そうじゃねえかよこの役立たずが」

武崎「アンタその立場でよくもそんなことが言えるよな、そんなこと言おうと助けてやらねえぞ!」

由加里「何が助けてやらねえだ、お前に助けることなんか出来んのかよこのヘボ探偵」

武崎「ふざけやがって」

諸岡の側に来る武崎。

諸岡のハサミを取ろうとする。

武崎「諸岡さん貸してくれ、こんな女は俺が爆破してやる!」  
諸岡「ダメだよ」

揉み合いになる二人。

須賀「やめろ、そんなことして線切っちゃったらどうするんだ」

と武崎を止めて引き離す。

武崎「須賀さん、よく考えろよ、こんな女と結婚したら大変だぞ、こんな女吹き飛んじやった方が良いよ」

須賀「(無視して由加里に) 由加里、いいかい、ここは僕の言うことを聞くんのだ」

由加里「・・・」

須賀「僕はどんなことがあっても君に死んで欲しくない、頼む

からここは少し我慢して、なんとか生き延びてくれ、頼む」

由加里「・・・（しおらしく）御免なさい、私が貴方のこと疑って、へんなこと考えちゃったばかりに、こんなことになっちゃって・・・」

須賀「ううん、悪いのは君じゃない、このボンクラ探偵が悪いんだ」

武崎「うるせえぞこの野郎」

須賀「君はこいつにたぶらかされただけなんだ」

武崎「・・・」

諸岡「さて、凡庸な別れのラブシーンはもう終わりですか？」

須賀「・・・」

諸岡「それでは皆さん、全員この部屋から出て行って下さい、僕はここで由加里と一緒に消滅します」

恵「止めて、お願い、止めてよ良和！」

須賀「待ってくれ頼む」

諸岡「ダメです」

須賀「由加里、この人に謝るんだ、今までのことお詫びして、命を助けて貰うんだ」

由加里「嫌よ・・・」

須賀「頼む、僕の為に、お願いだからそうしておくれよ、この人は元々お前のことを好きだったんだ。きっとお前が心から過ちを詫びれば、許してくれるに違いないんだ」

由加里「・・・」

諸岡「・・・分かったでしょう須賀さん、この女には何を言っても無駄なんです。さあ分かったら早く全員ここから出て下さい。さもないければ僕たちと一緒にこの世から消えることになりましたよ」

波島を見る孝子。

孝子を見る波島。

波島「・・・ようし分かった。こいつと最後まで付き合うのは俺だけで良い」

と言ってポケットからドアの鍵を出し、テーブルの上に置く。

一同「・・・」

波島はカメラを放そうとはせず、再び決意を込めてファインダーを覗く。

波島「出て行きたい奴は逃げてくれ、その代わりに俺が死んだ時は俺の死に様を外の人達に伝えてくれよな」

孝子「波島さん・・・」

波島「さあ、早く行きたい奴は行ってくれ」

誰もテーブルの鍵を取ろうとしない。

武崎がそうと鍵を取って行こうとするが、皆に睨まれたので止める。

孝子「・・・もう止めて下さい諸岡さん。お願いします。ねえ、貴方こんなことをしてはいけない！」

須賀「由加里、お願いだからもう一度僕の言うことを聞いてくれ」

由加里「(頸を横に振る)」

須賀「・・・何故だよ由加里」

由加里「・・・私、皆を裏切って女優になった時、いつかこういう日が来るんじゃないかって、覚悟はしてた・・・」

須賀「そんな・・・」

諸岡と恵「・・・」

由加里「御免なさい、私の為にこんなことになっちゃって・・・私が健二を信じ切れなかったばかりに・・・きつとバ

チが当たったのね」

須賀は諸岡の前に土下座して必死に懇願する。

須賀「諸岡さん、お願いですもう一度考え直して下さい。由加里をスターに育て、貴方がたの夢を奪い、友情を傷付けることになってしまったのは全て僕の責任なんです」

由加里「違う、女優になりたかったのは私の昔からの夢だったんだもの、お母さんが死んだのも私のせいなのよ。私が女優になりたいなんて思わなければ、お母さんが殺されることもなかったのに・・・お母さん、私がどんなに酷いこと言っても、ずっと私のこと思っていてくれた・・・御免なさいお母さん・・・(泣く)」

須賀「(諸岡に) お願いです、どうしても言うのなら、僕の命を差し上げます。由加里が悪いんじゃないんです、僕が悪いんですから、どうか僕の命と引き換えに、由加里

は助けてやって貰えませんか」

諸岡「不可能です」

須賀「・・・」

由加里「(観念して) 御免ね健二・・・もうダメだよ、私は助からない・・・」

須賀「そんなこと言うなよお前・・・」

由加里「私、ここでこの人と一緒に死ぬから、健二は皆と一緒に逃げて、何も健二まで一緒に死ぬことないよ」

須賀「そんなこと言うなよ由加里。頼むよ、僕の為に生きていてくれよう(泣く)」

由加里「・・・そもそも私と健二が愛し合う様になったのはユカリクレイジーがいたからだもの、この人と一緒に死ぬことになったのも、何かの運命かもしれない・・・」

一同「・・・」

由加里「今までありがとうね健二、私今まで貴方が本当に私のこ

と大事に思っていてくれて、守っていてくれたから、生きて来ることが出来たんだよ。嬉しかったよ、ありがとう  
・・・」

須賀「そんな・・・由加里、死なないでくれ・・・」

間

恵「・・・由加里」

由加里「何よ・・・」

恵「お願い、良和に謝って、私だって良和をこんな形で失いたくない・・・貴方だってかつては4人のメロスの一員だったんじゃないよ」

由加里「そうよ・・・私だって、あの頃のこと、忘れたことなんかないよ・・・楽しかったね・・・恵の言いぐさじゃないけど、あの頃ホント、ああ私達には何でも出来るんだって思った。ずっと私には、4人のメロスが原点だった

んだよ」

恵「それじゃ由加里、良和に謝ってよ・・・」

由加里「・・・」

諸岡「・・・それじゃ皆さん、いよいよお別れです。さあ早く部屋から出て下さい。本当にこれが最後ですよ、部屋から出るのか、それともここで僕達と一緒に心中するのか、どっちにするか決めて下さい」

一同「・・・」

波島「俺は最後まで残る。皆さんはどうぞ非難してくれ」

一同「・・・」

波島「さあ早く」

間

誰も動かない。武崎だけは行こうとするが、皆に睨まれたので止める。



孝子「誰も出ませんよ諸岡さん。貴方は自分と由加里さんばかりか、ここにいる他の五人全員も道連れにするおつもりなんですか、そもそも貴方が今ここでこんな死に方をしてしまっただけは、残された恵さんやお子さんはこれからどうやって生きて行けとおっしゃるんですか！」

恵「……………」

間

由加里「……………分かった。私、諸岡さんに謝ります」

諸岡「……………」

由加里「私貴方に謝る。だから他の人を道連れにするのは止めて、お願いだから……………」

恵「由加里……………」

諸岡「……………」

由加里「……………御免なさい、私が全部悪かったんです。私は自分

のことばかり考えていました……………貴方や早川さんと肉体関係を持ったのは、劇団で貴方たちを自分の思い通りに操りたいって思ったからだけなんです」

諸岡「止める！」

由加里「私は早川さんのことも、ましてや諸岡さんのことも、男性として好きだったことは一度もありません」

諸岡「止める！」

由加里「生涯で私が愛した男性は、須賀健二さんだけです。4人のメロスなんか私にとって、自分が世の中へ出て行く為の単なる踏み台にしかすぎなかったんです」

諸岡「止めるーぶっ飛ばすぞー！」

一斉に身を伏せる一同。

由加里「……………」

諸岡「止める、止める、止めてくれえ……………」

泣き崩れる諸岡。  
恐る恐る諸岡を見る一同。

孝子「諸岡さん」

諸岡「……(泣いている)」

恵「良和……」

間

諸岡「……おい波島さん」

波島「？」

諸岡「そのナイフ(テーブルの雑誌に突き立っているナイフ)」

波島「？」

諸岡「そのナイフを、須賀さんに渡して下さい」

波島「？」

諸岡「須賀さんはさっき、由加里を助ける為なら自分が死んでも良いとおっしゃいましたね」

須賀「(見る)」

諸岡「なら死んで下さい……そうしたら由加里を助けて差し上げます」

由加里「何言ってるの」

諸岡「さあ早く波島さん。須賀さんにそのナイフを渡して下さいー」

波島「……」

由加里「そんな、止めてよ波島さん」

目と目で見合う波島と須賀。

テーブルの雑誌からナイフを引き抜く波島。

ゆっくりと手を伸ばし、須賀にナイフを渡す。

受け取って諸岡を見る須賀。

諸岡「今から僕が百数えます。それまでに死んで下さい。自分で頸動脈を切るんです。貴方が死んだのを確認したら、由加里は放してあげます」

須賀「……」

由加里「健二、やめて、やめてよそんなこと」

数え始める諸岡。

諸岡「……いち、にい、さん、しい、ごお、ろく、なな……」

ナイフを握り、自分の首筋に当てる須賀。

数え続ける諸岡。

頸に当てたナイフを握り締めて由加里を見つめる須賀。

由加里「やめてよ、健二が死ぬことなんかないわ、ねえ、やめてお願いだから」

諸岡「(数え続けている)」

由加里「やめてー！ お願い、誰か止めてよ、なんで健二が死ななきゃならないのよ、貴方が死ぬことなんかないのよー  
お願いやめて！」

睨み合う諸岡と須賀。

ナイフに力を入れようとする須賀。

須賀「うわーっ……」

由加里「止めてーっ！」

須賀「うわわわわあーっ……」

しかし須賀は死に切れず、ガタツとナイフを落とす。てへたり込んでしまう。

由加里「健二！」

諸岡「やっぱり・・・卑怯者、お前が死ねる訳なんかないんだ」

須賀「ちくしょーっ・・・（床を叩く）」

諸岡「お前は卑怯な男だ。よし、もう一つ由加里が助かる方法を教えてやろうか」

爆弾の時限装置の表示はあと2分くらいになっ  
てい  
る。

須賀「（諸岡を見る）」

諸岡「本当の事を言うんだ、ユカリクレイジーの正体はお前だ  
な」

須賀「！」

諸岡「全て白状するんだ。そうすれば由加里を助けてやる」

須賀「・・・・・・・・」

諸岡「ユカリクレイジーはお前だな、一年前小包に爆弾を仕掛  
けて、由加里のお母さんを殺したのはお前だな！」

須賀「何を言ってるんだアンタは！」

諸岡「本当のことを言え、さもなければ今ここで死んでみる！

さあどうする！ 早くしないと爆弾が破裂するぞ！」

須賀「違う、違う、だから僕じゃないって言ってるじゃないか」

諸岡「だったら今ここで死んでみる！」

須賀「ムチャクチャなこと言うなよ！」

諸岡「どうした、死ねないのか、それとも由加里を爆破するか  
！ どっちだ！（コードを切ろうとする）」

須賀「よせ、止めてくれ！」

再びナイフを頸に当てる。

須賀「うわあーっ！」

今度こそ力を込めてナイフを引こうとする須賀。

由加里「止めてえーっ！」

縛られてなんかいなかった由加里がロープを振り解いて道具入れから飛び出して行く。

諸岡「待て、由加里まだだ！」

止める諸岡を振り払って須賀に駆け寄る。

由加里「御免なさい、御免なさい健二、全部嘘だったのよ、貴方がユカリクレイジーなのかどうかを確かめる為に皆で仕組んだ芝居だったのよ・・・」

諸岡「バカ由加里、もうちょっとだったのに」  
須賀「(号泣している)」

由加里「違うわよ、やっぱりこの人ユカリクレイジーなんかじゃなかったのよ、私の思いすごしだったのよ、御免ね健二・・・」

須賀「・・・僕だ・・・」

由加里「えっ？」

須賀「・・・僕だよ由加里、ユカリクレイジーは僕なんだ。君のお母さんを殺したのは僕だ！」

由加里「そんな、そんな嘘よ・・・」

須賀「・・・」

由加里「・・・返して！ お母さんを返して！・・・」

両手で由加里の頸を絞める須賀。

驚愕の表情の由加里。

須賀「愛してる、本当に愛してるんだよお前のことを」

咄嗟に諸岡と武崎が駆け寄り、須賀の手を由加里の頸から引き外す。  
倒れた由加里を恵が抱き起こす。

恵 「由加里、大丈夫由加里？」

須賀 「お前ら、よくも騙しやがったなチクショウ！」

抵抗する須賀をブツ飛ばす諸岡と武崎。

倒れて動けなくなる須賀。

波島 「そ、そんな、そんなバカなあ、健二さんが犯人だったな

んて、結婚式は、結婚式はどうなるんだあ！」

武崎 「結婚式はもうない！」

波島 「うわああああ（倒れて号泣する）・・・」

倒れた須賀を由加里を縛っていたロープで後ろ手に

縛る武崎と諸岡。

呆然と立ち尽くしている孝子。

孝子 「・・・これは一体どう言うことなんですか」

武崎 「すみません。全部僕が考えたことだったんです」

孝子 「説明して下さい」

武崎 「須賀さんが本当にユカリクレイジーなのかどうかを確かめる為の芝居だったんです。どうしても結婚式を挙げるまでに須賀さんがユカリクレイジーなのかどうかを判断する必要があったので、ちょっと乱暴でしたが込み入った芝居を仕組んだんです。最後はちょっと誤算もありましたが大方上手く行きました。でも皆さまがもと劇団員。俺が考えた通りに完璧に演じてくれました」

孝子 「そんな・・・」

とバラバラになったダイナマイトを拾って見る。

武崎「それは作り物です」

孝子「そんな・・・では由加里さんを爆破するって言う脅迫電話も貴方の仕業だったんですか？」

武崎「はい、あれは俺がボイスチェンジャーを使って、ユカリクレイジーの声を真似て吹き込みました」

孝子「そんな、でももし本当に須賀さんが自分の頸を切ったかどうかどうするおつもりだったんですか」

武崎「半分は賭けでしたが、もし本当に彼がユカリクレイジーなら、他人の為に自分が死ぬなんて事は出来ないと思います  
ました」

孝子「そんなあ・・・」

武崎「当初の予定では最終的に須賀は由加里さんの命を救う為に本当のことを白状すると言う筋書きだったんです。須賀が殺人を犯すほどのストーリーカー行為を繰り返していたと言うことは、裏を返せばそれだけ由加里さんを愛して

いたと言うことでもある訳ですから、由加里さんの命を救う為に、最後には本当のことを言うに違いないと思っ  
たんです。諸岡さんが須賀に死ねなんて命令したのは、  
諸岡さんのアドリブだったんですよ」

諸岡「僕はもしあそこでこいつが本当に自殺したのなら、それ  
ならそれで良いと思ってました」

孝子「そんな・・・」

へたり込む様にして椅子に座る孝子。

由加里「・・・私やっぱり信じられない・・・健二がユカリクレ  
イジーだったなんて・・・」

由加里を抱く恵。

恵「・・・」

武崎「由加里さん……俺は貴方が事務所に相談に来られて話を聞いた時から、須賀が犯人に間違いないと思ってました」

由加里「……」

武崎「それからさっきも言ったけど、俺は本当に今日諸岡さんたちが来てくれるかどうか心配だったんです。諸岡さんたちのお陰ですよ、須賀に自分がユカリクレイジーであると白状させることが出来たのは」

恵に抱きついて泣く由加里。

由加里「……ごめんね恵、私随分酷いこと言っちゃったね」

恵「そんなこといいよ……由加里の方がずっとずっと辛い思いして来たんだから」

由加里「どうもありがとう」

恵「私も……」

由加里「諸岡さん（と見る）……」

側に来て由加里を抱きしめる諸岡。

由加里「御免なさい……御免なさい……」

諸岡「いいんだ、僕だってまだ、人生終わったなんて全然思っちゃいないから、そもそも人の夢を取り上げることなんか、誰にも出来る訳ないじゃないか」

由加里「……」

持っていた鍵でドアの鍵を開ける武崎。

ドアを開く。

武崎「だけど拘留中の早川さんが須賀宛てに手紙を書いて出したりするとは思わなかったよなあ、あれには俺も焦ったよ」



諸岡「早川の奴、僕達には何にも連絡よこさないクセに」

恵「出て来たらまた、皆で会おうね」

由加里「そうだね（笑）」

マイクを持って立ち上がる孝子。

孝子「波島さん」

波島「？（と見る）」

孝子「波島さん、カメラを回して下さい」

波島「え？」

孝子「番組の締めくくりを撮影しなければ、私達の仕事は終わらないんじゃないやありませんか」

波島「・・・」

孝子「さあ早く、この企画の最後をしっかりと撮影して下さい」

波島「・・・分かった」

と立ち上がり、カメラを手にして構える。

マイクを持ってカメラの前に立つ孝子。

孝子「（カメラに）何と言うことでしょうか、事件は私達が思いもしなかった急展開を見せ、考えもしない結末を迎えることになってしまいました・・・しかし皆さん見て下さい。この素晴らしい仲間達を、犯人を捕まえたのは彼等の変わらぬ友情と勇気です。ご覧下さい、この彼等、かつて4人のメロスとして活躍した若者たちの勇姿を」

突然大声を出す恵。

恵「人類の未来と平和の為に！」

ポーズを取る恵。

諸岡と由加里も並んでポーズを取る。

諸岡「力を合わせれば何でも出来る！」

早川「（武崎）永遠の愛と、友情と！」

由加里「勇気と希望の為に！」

4人「フォーエバー！ 4人のメロス！」

爆発的な音楽と照明が踊りだす。音楽に乗せて踊り、

跳ね回る諸岡、恵、由加里。

決めのポーズでピタリと止まる三人。

諸岡「行くぞ！」

恵と由加里「おう！」

開かれたドアから走って出て行く三人。

追ってカメラをパンする波島。

孝子「皆さんどうもありがとうございました。これで現場から  
の中継を終わります（と頭を下げる）」

カメラを降ろす波島。

武崎「須賀の事は俺等で見張っていますから鬼海さん、警察を  
呼んで貰えますか」

孝子「・・・分かりました（と行こうとする）」

武崎「あ、それから」

孝子「？」

武崎「結果的に貴方も騙すことになってしまったことを、お詫  
びします」

孝子「・・・」

武崎「でも貴方が、諸岡さんの目的が以前のユカリクレイジー  
とは違うんじゃないかと気付かれた時はドキッとしまし  
たよ」

孝子「（微笑み）こちらこそ本当の事情も知らずに、貴方たちを視聴者の興味の対象にしようとしたことをお詫びします」

一礼してドアから出て行く。

波島「ふん、とんだ一杯を食わされたな・・・」

武崎「いや、貴方も見事でしたよ、本当にここで爆弾が爆発するかもしれないのに、最後まで逃げようとはしなかった」

波島「ケツ、これで今まで考えてた計画が全部パアだ」

武崎「でも結果的にかなり面白いモノが撮れたんじゃないですか」

波島「バーカ、こんなもの放映出来るか、犯人は社長の息子なんだぞ」

武崎「なら他局へ持ち込めば良いじゃありませんか」

波島「オッ（閃いた）・・・そうか」

と側へ来る、途端に鼻をつまむ武崎。

武崎「（笑う）」

波島「そうだな、そりゃいい、オイ、このこと誰にも言うなよ（と行こうとする）」

武崎「あ、待って波島さん」

波島「（止まる）」

武崎「放映する時は俺の顔にモザイクかけて下さいよ、顔がバシチャ商売にならないんですから」

波島「（笑い）分かったよ」

武崎「約束ですよ」

波島「ああ、じゃな、あと宜しく」

とカメラを手に出て行く。

武崎と縛られた須賀だけになる。

須賀「・・・なあ」

武崎「なんだよ、心配するな、今警察が来る」

須賀「やっぱり僕は、警察に捕まらなきゃならないんだろうか」

武崎「そりゃあそうだよ、なんたって人殺しなんだから」

須賀「うっ（泣く）・・・なあアンタ」

武崎「・・・なんだよ」

須賀「由加里は全然覚えてないみたいだけど、始めて4人のメロスの公演を観た時、僕劇場から由加里が出て来るの待ち伏せて、食事でもしませんかって、誘ったことがあるんだ」

武崎「・・・」

須賀「そしたら由加里、私はアンタなんか構ってる暇はないって、どうしてだって聞いたら、今は仲間の方が大事だからって」

武崎「・・・だからどうしたってんだよ」

須賀「僕にもあんな友達欲しかったよ」

武崎「・・・」

武崎「あいつらだっけ前からずっとあんな良い友達だった訳じゃないんだぜ、今なったんだ。お前が由加里さんのお母さんを殺したりしなければ、一生互いに憎みあったまま、分かり合うこともなかったかもしれないんだ」

須賀「（泣く）」

武崎「泣いたってしょうがないよ、でも由加里さんが俺に相談に来た時言ってたよ、私には、あの人ユカリクレイジーだなんて信じられない、本当に良く私の力になってくれた。私はあの人がいなかったら、ここまで生きて来ること出来なかったし、これから先も生きて行けないかもしれないって」

須賀「・・・」

武崎「由加里さんの感じたお前の優しさが、嘘じゃなかったら

良かったよな」

須賀「嘘じゃないよ、嘘なんかじゃなかったんだよね……」  
(泣く)

泣き続ける須賀の音が響いて。  
暗転。

おわり